

学び系と研究者

奈良 敏行



『音信不通』九十九号に、丸祐一さんが、「「学び系」の誘惑」というタイトルで、寄稿して下さっている。法哲学者で大学教授だ。

《「学び系」へ誘惑する定有堂の本棚を眺めれば、あれもまだ読んでいない、これも読んでいない、でも研究の本も読まなければ、という葛藤。それが僕にとって定有堂だった。》

研究者として生きるには「定有堂に並んでいるような本は、研究の逃避先になってしまうので避けねばならなかった」という告白だ。定有堂の選書は「新書に対する高い評価」というのも異色だったと顧みる。

結論から言うと学び系と研究者はカテゴリーが違う。越境する意思があるかないかの問題だと思う。四十年前に定有堂教室「心理学講座」を始めた椎名健教授は、専門が認知心理学で実験心理学だった。一般人の学びとはとも別世界だ。ただドイツ留学から戻り大学に八年勤めて、そろそろ町に出てみたいという意欲が強くなっていった。越境したかったのだ。町での学びを中心にあうんの出会いだった。

折も折、畏友三砂慶明さんが、『これは水です』という本を送ってきた。田畑書店刊行で編集発行の大槻慎二さんと親しくしているので、代表作を共有しようということだった。著者デヴィッド・フォスター・ウォレス。大学の卒業生に「リベラル・アーツ」を語ったものだ。ウォレスには『ワイトゲンシュタインの箒』や『奇妙な髭の少女』などの代表作があるが、とても歯が立たなかった。ジョイス、ナボコフ、ピンチオン、ヴォネガットの系譜の作風なのだ。《ほんとうに大事なことは考える容量をただ増やすことではなく、むしろなにを考えるべきかを選ぶことにある》

卒業した後の人生はつまらないものだ。せいぜい銃でじぶんの頭を撃ち抜かないようにとうったえる。卒業後の人生には、容量をひたすら増やすアカデミズムも含まれる。

必要なのは、「ものの考えかた」を身につけるその一事だけだという。ウォレスは双極性障害で、この講演の三年後に縊れて死んだ。

リベラル・アーツとはものの考え方が、町の中で考えつづける人たちを定有堂では「学び系」と呼んだ。そしてその場として「定有堂教室」「音信不通」が存在した。学び系には共有する場が必要なのだ。

専門書でなく「新書」に素材を求めるのはなぜだろう。「大規模言語モデルは新たな知能か」を読んでいたら、「その世界のデータを圧縮できるようになる」ことで、世界を理解できるようになる」とあった。考えるということとはきつと「圧縮」することなのだ。定有堂教室「読む会」の講師、岩田直樹さんが選択する新書は、この「圧縮」を成し遂げている良質な本だった。

『「具体⇄抽象」トレーニング』は定有堂の定番だが、次のようにいう。

『古い系をリセットして新しい系を生み出すためには新たな抽象度の高い状態を作り出す必要があります。』

「単に大量の事象を知っていること」の付加価値は急速に下落してきていると断じる。これも定有堂の定番だが、『知的複眼思考法』はいう。

『集団の均一性が高く、その集団への所属が強制されて

いればいるほど、集団内の異質性は集団から排除を受けらる』

これがアカデミズムを含み、大学卒業後に待ち受けるつまらない日常なのだ。

町へ抜け出て目覚めた人はどうするか？ 学び直すのだと思う。「知的複眼思考法」を。それが苅谷のいう「複数の視点にとらわれない相対化の思考法」なのだ。「学び系」の人たちは、「つまらなき」から覚醒しようとしている。越境する決意を抱いた人たちの共有する場、それが本のピオトープなのだと思う。

2024. 10. 06

(参考)

デヴィッド・フォスター・ウォレス『これは水です』田畑書店 2018

同右『ヴァイトゲンシュタインの箒』講談社 1999

同右『奇妙な髪の少女』白水社 1994

岡野原大輔『大規模言語モデルは新たな知能か』岩波新書 2023

細谷功『「具体⇄抽象」トレーニング』PHP 2020

苅谷剛彦『知的複眼思考法』講談社＋α文庫 2002